

令和6年度 小規模多機能型居宅介護「サービス評価」 総括表

法人名	特定非営利活動法人 楽	代表者	柴田 範子	法人・事業所 の特徴	<p>ひつじ雲は「人格の尊重」「生活の継続性」「社会参加」「自主性の向上」を理念としています。利用者一人一人が、その方の持っている力を発揮しながら過ごせるようにお手伝いしていきます。しっかり食べるということを始め、生活の中での動作ができるだけ続けられるように、その方にあった方法で体力作りをしています。</p> <p>近年では、地域の中でお一人暮らし方も多く、必要な時は生活全般に関わり支援させていただく事が多くなっています。また、法人設立以来地域と繋がるような活動をしてきました。生活支援コーディネーター活動、ライフサポートワーカー活動など行い地域とのご縁が繋がりが続けるようにしています。</p>
事業所名	ひつじ雲	管理者	工藤 一枝		

出席者	市町村職員	知見を有するもの	地域住民・地域団体	利用者	利用者家族	地域包括支援センター	近隣事業所	事業所職員	その他	合計
	1人	0人	3人	0人	1人	1人	人	2人	0人	8人

項 目	前回の改善計画	前回の改善計画に対する取組み・結果	意見	今回の改善計画
A. 事業所自己評価の確認	<p>職場環境の整備、改善がつねに求められている。</p> <p>介護記録のツールを変更した。業務の効率化、課題であった情報共有がしやすくなるはず。映像での記録も可能になり、ご家族に、より細やかに情報をお伝えしていきたい。特性を良くとらえ、業務に活かしていきたい。</p> <p>職員に、外部研修への参加を勧める。スキルアップをすることで、業務の幅が広がり、職員一人一人の自信に繋がる。</p>	<p>職員間の情報の共有が常に課題である。そのための改善が大事と取り組んでいる。</p> <p>昨年から採用している介護記録ソフトがよく機能している。職員も情報をとりに行く体制になってきている。</p> <p>なによりも、ご家族も閲覧できるシステムなので意見や情報を伝えやすくなっている。</p> <p>職員の外部研修への参加はあまり実践できていない。</p>	<p>事業所自己評価で「できていない」としている職員がいる。勤務時間が少ないための評価となっている。意見を出しやすい職場環境にして、経験を積みながら業務を覚えていくようにしたい。</p> <p>事業所自己評価に対しては、話し合いが出来ていると評価いただいた。</p>	<p>業務上の情報共有は最も重要視する点である。データ上の共有は当然であるが、やはり職員間の口頭での確認はコミュニケーションという意味合いでも継続していく必要がある。意見の確認もできる。ひつじ雲の職員は、しっかり意見交換ができるという体制にしていく。</p>
B. 事業所のしつらえ・環境	<p>事業所の建物内外が、この地域の環境の一部になっていると思う。掃除をきちんと行い、居心地の良い事業所にしていく。</p> <p>いまだ、特別な用事が無いと入りづらいという印象があるようなので、職員もすぐに気づき、お声掛けするような、気安さをもっていきたい。</p> <p>掲示板は、事業活動の広報に役立</p>	<p>通りに面している建物である。建物の周辺を毎日掃き掃除を続けている。</p> <p>年度末近くなってしまったが、敷地内に掲示板を設置することができた。活用していく。</p>	<p>玄関に看板がある。「小規模多機能」という名称がわかりにくい。「ひつじ雲」という事業所名だけにして、何ができるか、こういうことができるかとわかりやすくアピールした方がよい。</p> <p>掲示板は見やすく活用した方がよい。</p> <p>建物の作りが施設らしくない。入りづらい印象がある。</p>	<p>ひつじ雲の活動広報の手段を工夫する。</p> <p>掲示板にイベントの案内、事業所の役割など目立つように掲示。期限管理きちんで行う。地域の情報も掲載させてもらう。掲示板自体に「掲示板」と表記する。</p> <p>ひつじ雲の看板をリニューアル検討。わかりやすい物にする。</p> <p>敷地内に「よろず相談所」と書い</p>

	つだらう。建物のオーナーに相談するなど検討する。			た立て札を設置する。 環境整備は継続する。
C. 事業所と地域のかかわり	「生活支援コーディネーター」と「ライフサポートワーカー」の活動を担う職員が、より自覚をもって活動できるようにする。地域の方々に「相談しやすい」と信頼していただくには、まずは顔を知って頂く。ひつじ雲の職員をいつも見かける、話しやすそうと感じて頂けるように、毎日の活動としていく。	ライフサポートワーカーの登録者が7名いる。活動時間も毎日設けているが、活動が不十分である。 また、イベントとして行っている地域カフェへの参加者も固定化してきている。	カフェへの参加者が固定化していることは、それでも良い。その参加者の変化が把握できて、対応していくのもライフサポートワーカーの役割。 ひつじ雲のイベントを地域包括と共有できると、人から人へ繋がりが出来てくるのでは。 生活支援コーディネーターの活動に対して、このままでは閉じこもってしまうと予測される方に週一回程度の訪問で関わる事で本人の意欲・活力が戻せっていると評価いただく。	ライフサポートワーカーの活動をしっかり行うために、職員でまず話し合いを行う。業務上の役割から、ライフサポートワーカー活動量が均等でない。それゆえ活動内容の理解にばらつきがある。今年度はそれを改善していきたい。地域の方々が気軽に相談できるような関係性作りをするために、どのような企画が良いのか、まずは職員で定期的に話し合いの時間をつくる。また、地域包括と共有しイベントの企画をしたり、民生委員や町内にイベントの企画を案内したり、地域の力をお借りして活動を継続的にやっていく。
D. 地域に出向いて本人の暮らしを支える取組み	今年は、利用者の方々と外での活動を増やしていく。 以前、地域活動として道路のゴミ拾いを日課にしていた。高齢になって支援を受ける立場になっても、誰かの役に立つと言うのは、私たちの誇りである。利用者の方々とそのような思いで、活動ができるようにともに過ごす。 地域の行事や、イベントの情報も積極的に得て、地域の一員として参加する機会を増やしていく。	地域活動としてのゴミ拾いは、殆どできていなかった。散歩も天候不順を理由に以前よりは少なくなっている。天候の良い頃には出来るだけ行うようにしたい。 「ひこうき雲」でカレーと豚汁を作る機会があった。利用者の方も調理をしたり、配膳したり力を発揮してくれた。	認知症を持っている方でも、出来る事がたくさんある。そのような姿を地域の方に理解してもらう機会は大変。高齢になっても、認知症になっても地域で暮らす事が自然にできている。	ライフサポートワーク活動のイベントは地域の方だけの参加でなく、ひつじ雲の利用者も参加する。地域の方と知り合うきっかけにもなる。 また利用者の方が、元々参加していた催しに継続して参加できるように支援を続ける。 今年度行った「カレーの会」の調理の機会など、ご本人の役割を發揮して貰う機会も作っていく。
E. 運営推進会議を活かした取組み	地域で、心配な方として見守られている方について、一緒に話し合える場にしていきたい。この地域で暮らす方々が、日常でも災害時でも、地域を頼るように、ひつじ雲も頼って頂けるように、推進会議でひつじ雲の取り組みを伝え	推進会議の場で、ひつじ雲の取り組みをお伝えしている。 生活支援コーディネーターやライフサポートワーク活動の周知や理解の共有をする場になっている。	推進会議には、地域包括支援センターも参加していただいております、生活支援コーディネーター、ライフサポートワーク活動を俯瞰的に説明して頂いている。 地域支援に携わっている参加者の方々と地域の心配な方への取	推進会議は、事業所の取り組みを伝えられる貴重な機会である。より多くの方々に伝えることができるように、集いやすい会にしていきたい。今回はバザーを開催してはとご意見あったので、地域の方の協力を得て開催を予定する。開催場

	ていく。		り組みなどの話が出来ている。しばらく行っていなかったバザーの開催を行う事も地域の方々の理解が深まる機会になると意見いただく。	所、時期など皆で検討する。ライフサポートワーク活動などの理解をさらに深めて頂くよう、今後も活動内容の報告・相談をしていく。 災害時の協力体制が取れる様に、定期的に議題に上げていく。
F. 事業所の 防災・災害対策	実態に則した避難訓練を確実に 行っていく。備蓄品の管理をきち んと行っていく。期限の管理や、 在庫品の管理をしっかり行う。 川崎市「個別避難計画」を作成す る。要支援者の方に対して、避難 計画を立てるために、どのような 地域資源があるかを調査し、具体 的な計画をたてるようにする。	要介護3以上の方を対象に「個別 避難計画」を作成した。 見直しや、新しい対象者の方への 計画も随時行う必要があったが 対応できていなかった。 避難訓練は定期的に行っている。	昨年 8 月大雨により洪水の心配 があった。独居で認知症がある方 を、急遽ひつじ雲への泊りで対応 した。経緯を町内会に伝え協力体 制をとった。地域との連携は必須。 「個別避難計画」の避難先として は施設が有力視されているが、数 量的に限界がある。地域企業など との連携も必要だろうという意 見がでる。 実際大災害時の避難支援は課題 がある。	災害に備え、避難訓練は定期的 に行う。実際を想定して、初期対応 や、通報の手段など繰り返し訓練 していく。利用者の介護度変更 や、新規利用などあるので、「高 齢者災害時個別避難計画」を随時 見直しする。実態に則した内容を 検討していく。 防災、災害時は地域との連携が重 要。町内と連携が取れるような関 係作りをしていく。